

「なぜ、キャリア教育を研究するのか。」

『理論なき実践は盲目であり、実践なき理論は空虚である』

これはグループダイナミクス研究の創始者である Kurt Lewin の言葉です。

「研究をする」ということは、単なる思いつきや自己主張ではありません。自分の研究が何故必要なのかを、先陣の学術的な研究や様々な現象等を基にしながら「理論的に」かつ「誰もがわかるように」説明をし、実践へとつなげていくことが必要です。そこで、大切なのが「自分らしさ」です。

「自分らしさ」というものを見つけるのは簡単なことではありません。何故なら、自分の顔を、鏡を介さずに観る必要があるからです。自分のことは自分が一番知っているようでありながら、客観的に自分を観ることはなかなか難しいものです。しかし、これを乗り越えないと自分らしい研究、すなわちオリジナリティーのある研究にはたどり着けないのです。

研究を進める上で大切なことは、

「何を研究するのか？（研究課題は？ 調査対象は？ 研究内容は？ etc.）」

「何故、その研究するのか？（何のための研究なのか？ etc.）」

「どのように研究するのか？（実証研究？ 実践研究？ etc.）」

「どのように役立てるのか？（研究と実践のつなぎ方への示唆は？ etc.）」

といった、「段取り」や「お作法」が必要であることは言うまでもありません。これらを踏まえた上で、「自分らしい研究」を進める必要があるのです。

日本に動物行動学を最初に紹介した日高敏雄(2013)は、著書「世界を、こんなふうに見てごらん」の中で「ぼくは、小学校のころ学校に行かなかった。戦時教育下に、いわば登校拒否のぼくが過ごした場所は、まだ東京のそこかしこに残る原っぱだった。あるとき、枝をいっしょうけんめいはっている芋虫に思わず話しかけたことがある。『おまえどこに行くの？ 何を探しているの？』芋虫は答えなかったけど、ぼくにとって、それは大切な原点だったかもしれない。必死ではっている。ほうのは筋肉を使っているからだ。そういう話では何もわからない。少なくともいきものには、なぜその行動をするのか、目的があるはずだ。それを問わなければ何も始まらないではないか。」と記しています。

前述の文章の一部を置き換え、

「『キャリア教育を研究する』、それは、キャリア教育がキャリア発達を促すからだ。そういう話では何もはじまらない。少なくとも、『キャリア教育の研究』には、『なぜ、キャリア教育を研究するのか』といった目的があるはずだ。それを問わなければ何も始まらないではないか。」としてみると、キャリア教育の研究者として、実践者として何を始めればいいのか

等々、様々なことを考えます。

『キャリア教育の研究』の目的は研究者や実践者によって様々なものがあります。そう考えると、『キャリア教育の研究』の大切な原点は、研究者や実践者個々人の「自分らしさ」の中にあると思うのです。そして、それを問わなければ何も始まらないのです。

引用文献

日高敏雄 2013 世界を、こんなふうに見てごらん 集英社文庫

(上越教育大学 山田智之)